日本医史学雑誌第五十二巻第三号　平成十七年十二月　九日受付
平成十八年　九月二十日発行　平成十八年　六月十六日受理

京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績、業績

――第二報　松岡道治の学術論文

廣谷速人
島根医科大学名誉教授

〔要旨〕松岡道治は帝国大学卒業後、東京帝国大学、京都帝国大学在籍中の一六年間に、少なくとも邦文論文一三三標題、一九一編、ドイツ語論文三一編を発表した。その研究は多岐に亘るが、とくに当時の先端医学であったエックス線診断学の整形外科学領域への応用に情熱を注いだ。各種医学会では整形外科的疾患を紹介するのに努め、ことに先天性股関節脱臼ならびに骨関節結核の診断、治療に終生学問的興味を持ち続けた。松岡は、わが国整形外科学の先駆者として、斯界の発展に大きく寄与した。

キーワード――松岡道治、整形外科学、京都大学医学部、京都帝国大学

第一章　はじめに

筆者は本論文第一報[1]において、明治三九年五月京都帝国大学医科大学に整形外科学講座が新設されるに至った経過と外科学講座との関係を報告したが、この第二報ではその初代担当であった松岡道治（整形外科学講座担当当初の身分は助教授、明治四〇年五月教授に昇任）の学問的業績のうち、学会・講演会・講習会などでの発表ならびに学術論文、とくに学位請求論文について調査の結果を報告する。

第二章　松岡道治の学術論文

松岡道治が帝国大学医科大学卒業の明治三一（一八九八）年[2][3][4]の始めから京都帝国大学医科大学教授依願免官直前の大正二（一九一三）年末までの一六年間に発表した学術論文は、演題だけの記載にとどまる学会・講演会・講習会における発表や学会抄録を含めて、少なくとも邦文論文一三三標題、一九一編、ドイツ語論文三一編という膨大な数にのぼることを、著者は本稿脱稿までに確認した。本報では、これらの学術論文を松岡の略歴[2][3][4]とともに年次別に表示（表1）するとともに、松岡の学問的背景やそれらの論文の特徴を述べる。

表1．松岡道治業績表

注: 表1内の文献を本文中引用するときは“年別−論文番号”で表す（たとえば明治33年の欄の3番目の論文「銀剤ノ消毒力」を本文で引用する場合は“33-3”とする）。

暦　年	<略歴[2,3]>、業績（学会発表、論文、講演、講習会など公表され、記録の残っているものすべて。単著では著者名〔松岡道治〕を略す。演:演題のみ、抄:抄録のみ。〔 〕内はその年の学会等の開催月/日）
明治30 (1897)年	<12月: 帝国大学卒業[4]>
明治31 (1898)年	<5月: 帝国大学助手> 1.「喝囉仿謨*麻酔ニ於ケル不快偶発症ノ療法注意」『中外医事新報』438:826-827.
明治32 (1899)年	1. X線光線ニ就テ（東京医学会例会〔7/20〕、演）.東京医学会雑誌. 13(14):602. 2. ユリウス・スクリーバ,通訳者　松岡道治「銀剤ノ消毒力」（第1回日本外科学会総会〔以下‘日外総会’と略す〕）『日本外科学会雑誌（以下『日外会誌』と略す）』1:433-440.
明治33 (1900)年	<4月:済生学舎講師[5]> 1. ユリウス・スクリーバ述,松岡道治通訳「結核性骨及ヒ関節疾患ノ所置（第2回日外総会）」『日外会誌』2:1-5. 2.「乳嘴様腫瘍ノ二例」『日外会誌』2:178-182. 3.「稀有ナル骨折ノ二例」『東京医学会雑誌』14(14):128-131. 4.「X光線ノデモンストラチオン（第13回東京医学会総会[4/4],題）」『東京医学会雑誌』14(8付録):4.および『済生学舎医事新報』89:436. 5.「外科的創傷治療ニ就テ」『医事新聞』569:158-160, 570:229-231, 571:311-314, 572:396-398, 573:459-461, 574:528-530, 575, 604-607, 577:747-752, 578:822-824. 6.「筋肉血管腫ノ一例」『医学新聞』578:816-818. 7.「筋内血管腫ノ第二例」『医学新聞』579:885-886. 8.「東京帝国大学第一医院臨床講義第一回報告. 教授スクリーバ博士執刀,松岡道治述. 上顎骨内皮細胞腫ノ一例」『医事新聞』571（附録, 臨床講義）:1-4,572（同）:5-8. 9.「東京帝国大学第一医院臨床講義第二回報告.教授スクリーバ博士執刀,松岡道治述.脊椎ノ後彎症—結核性脊椎炎—特ニ機械的療法」『医事新聞』573（附録,臨床講義）:11-12,574（附録,臨床講義）:5-8. 10.「内翻馬足ノ一例（臨床講義）」『済生学舎医事新報』90:503-509. 11.「亀頭淋性包茎ノ一例（臨床講義）」『済生学舎医事新報』93:818-819. 12.「結核性肘関節炎ノ一例（臨床講義）」『済生学舎医事新報』95:1006-

明治33 (1900)年 続き	1010. 13.「上膊護謨腫兼橈骨神経及ビ尺骨神経麻ノ一例(臨床講義)『済生学舎医事新報』90:1084-1087.
明治34 (1901)年	<3月:京都帝国大学医科大学外科学講座助教授> 1.「バセドー氏病ニ対スル外科的療法」(第4回東京医学会総会〔4/5〕,抄)『東京医事新誌』1205:896-897. 2.「坐骨神経性側彎曲ニ就テ」(第4回東京医学会総会〔4/5〕),抄)『東京 医事新誌』1207:983-984. 3.「両下肢第三度火傷ノ一例(臨床講義)」『済生学舎医事新報』97:30-31. 4.「第三期黴毒ノ一例(臨床講義)」『済生学舎医事新報』99:206-209. 5.「直腸癌ノ一例(臨床講義)」『済生学舎医事新報』101:396-398. 6.「麻痺性副睾丸炎兼陰嚢水腫ノ一例(臨床講義)」『済生学舎医事新報』102:488-494. 7.「瘭疽ノ一例(臨床講義)」『済生学舎医事新報』103:592-594. 8.「坐骨神経性側彎ニ就テ」(順天堂医事研究会〔4/4〕).『東京医事新誌』1207:983-984. 9.「ウェー子ルト氏液体電流遮断器ノ説明及其応用」『医事新聞』581:26-29. 10.「外科的創傷治療ニ就テ」『医事新聞』582:113-115, 584:280-283, 587:226-229. 587:226-229. 11.「ドクトルスクリーバ講述, 医学士松岡道治筆記. 頸部腫瘤―甲状腺腫。外科的治療ニ就テ」『医事新聞』584:257-260, 586:414-418.
明治35 (1902)年	<8月:ドイツ留学> 1.「胃内毛髪腫瘍ノ一例」(第3回日外総会)『日外会誌』3:335-339. 2.「膀胱尿道結石ノ一例」(第3回日外総会)『日外会誌』3:557-560.
明治36 (1903)年	1. Über multiple Papirome der harnführenden und der harnbereitenden Wege der Niere. Deutsche Z eitschrift fur Chirurgie (以下'Dtsch Z Chir' と略す). 68:306-317. 2. Über die Bedeutung der Knorpelbildung nach Fraktur. Dtsch Z Chir. 70:13-20.
明治37 (1904)年	1. Über Gewebsveränderungen der künstlich erzeugten Kyphose der Schwarzwirbelsäule der Kaninchens. Archiv für Entwicklungsmechanik der Organismen. 18(2): 253-260. 2. Beitrag zur Lehre von der fötalen Knochenerkrankung. Dtsch Z Chir. 72:428-444. 3. Über die Knochenresorption durch maligne Geschwülste. Dtsch Z Chir. 73:204-215.

明治37 (1904)年 続き	4. Beitag zur Lehre von Adamantinom. Dtsch Z Chir. 74: 594-600. 5. Ein Beitrag zur Lehre von osteoplastischen Carcinoma. Dtsch Z Chir. 77:390-400. 6. Die Regeneration des Knorpelgewebe. Virchows Archiv für pathologische Anatomie und Physiologie und für klinische Medizin. 175:32-45.
明治38 (1905)年	＜7月:医学博士＞ 1.「胎児ノ骨病論増補(独文)」『官報』6611〔7/14〕:598. 2.「骨折後軟骨生形ノ意味ニ就テ(独文)」『官報』6611〔7/14〕:598-9. 3.「家兎ノ尾椎骨ニ人工的ニ生セシメタル後彎ニ於ケル組織変化ニ就テ(独文)」『官報』6611〔7/14〕:598. 4.「「アダマンチノム」(Adamantinam)論増補((独文)」『官報』6611〔7/14〕:599. 5.「悪性腫物ニ因スル骨組織ノ消失」『官報』6611〔7/14〕:599. 6.「軟骨ノ再生機能」『官報』6611〔7/14〕:599. 7. Über Gewebsveränderungen des verlagerten Hodens, Nebenhodens und Samenleiters. Virchows Archiv für pathologische Anatomie und Physiologie und für klinische Medizin. 180:484-499.
明治39 (1906)年	＜5月:帰朝、京都医科大学整形外科講座担当＞ 1.「「オルトペヂー」ノ一小史」『中外医事新報』632:1-3. 2.「骨及ビ関節ノ結核」『中外医事新報』634:1081-1089,635:1185-1190, 637:1304-1305, 641:1618-1625,642:1677-1681. 3.「「ラヂウム」放線ノ皮膚ニ及ボス作用ニ関スル試験的研究.Exp. Unters. über d. Entwicklung d. Radiumstrahlen auf d. Haut. 故中井元吉氏業績」『東京医事新誌』1464:1097-1100. 4.「脊椎の硬直」(京都医学会第29回例会〔11/17〕,抄)『京都医学雑誌』4(1):94-95.
明治40 (1907)年	＜5月:京都医科大学教授＞ 1.「骨及ビ関節ノ結核」『中外医事新報』645:171-178. 2.「「オルトペヂー」トハ何ソヤ」†『中外医事新報』643:49-52, 644:93-97, 646:235-241, 649:445-450, 653:724-727, 654:813-820, 656;950-953, 657: 1017-1020, 659:1173-1181, 660:1243-1248, 661:1307-1313, 662:1386-1391, 663:1450-1453, 664:1525-1533, 665:1607-1612. 3.「骨折後ノ軟骨成生ニ就テ」『中外医事新報』651:577-584. 4.「胃癌ノ発育(Wachstum)及ヒ蔓延(Verbreitung)」(芸備医学会京都部会総会)『芸備医事』129:25-29. 5.「麻痺セル下肢ノ治療ニ対スル二三ノ注意」『京都医事衛生誌』164:5-6.

明治40 (1907)年 続き	6.「佝僂病ニ就テ」(第5回日外総会、抄)『日外会誌』8(1):31-32. 7.「骨及ビ関節ノ結核」(第5回日外総会、抄)『日外会誌』8(1):36. 8.「先天性股関節脱臼」(第5回日外総会、抄)『日外会誌』8(1):37. 9.「脊柱ノ強直」(第5回日外総会、抄)『日外会誌』8(1):49-50. 10.「胃癌ノ病理解剖ニ就テ」(第5回日外総会、抄)『日外会誌』8(1);59-60. 11.「臨床上必要ナル脊柱ノ解剖及生理ニ就テ」『東京医学会雑誌』23・24:83-89. 12.「先天性股関節脱臼ニ就テ」(京都医学会第32例会〔2/26〕)『京都医学雑誌』4(2):105106. 13.「外科的疾患ニ「ヒペレミー」ヲ施ス上ニ於ケル注意」(京都医学会第33例会[3/16],抄)『京都医学雑誌』4(2):108-109. 14.「放射状菌病ノ一例」(京都医学会第33例会[3/16],抄)『京都医学雑誌』4(2):109-110. 15.[結核性股関節炎並ニ脊椎「カリエス」ノ解剖的変化」(京都医学会第33例会[3/16],抄)『京都医学雑誌』4(2):110-111. 16.「英吉利病ノX線写真供覧」(京都医学会第33例会[3/16]、抄)『京都医学雑誌』4(2):111-112. 17.「千人以上治療シタル畸形患者ニ就テ」(京都医学会第四次総会[5/18],抄)『京都医学雑誌』4(4,総会号附録):10-12. 18.「理学的療法」(京都府医師会発会式演説[10/13]、題)『京都医事衛生誌』163:16. 19.「麻痺セル下肢ノ治療ニ対スル一二ノ注意」(京都医学会第37回例会[10/19],抄)『京都医学雑誌』5(1):77-78および『京都医事衛生誌』164:5-6. 20.「先天性股関節脱臼ニ就テ」(第21回日本小児科学会京都地方会12/15],題)『京都医事衛生雑誌』154:64. 21.「整形外科学」(京都医学講習所」臨床講義、題〔明治40年3月より〕『医海時報』668:409. 22. Über primäre Magensarcome.『東京帝国大学紀要　医科(Mitteilungen aus der Medicinschen Fakultät der Kaiserlich-Japanischen Universität)』7: 287-336.
明治41 (1908)年	1.「佝僂病ニ就テ」『日外会誌』8(3):137-140. 2.「骨及ビ関節ノ結核」『日外会誌』8(5):271-273. 3.「脊椎ノ強直」『日外会誌』8(5):274-280. 4.「先天性股関節脱臼」『日外会誌』8(5):281-282. 5.「胃癌ノ病理解剖附胃癌療法ニ対シ臨床医家ノ注意ヲ促ス」『日外会誌』8(5):283-293. 6.「癌腫に就て」『医海時報』707:16-17. 708:106-107.

明治41(1908)年続き	7.「先天性股関節脱臼ニ就テ」『医事新聞』749:22-25, 750:91-95. 8.「先天性股関節脱臼ノ非観血的治療」『医事新聞』752:241-243, 753:339-341, 754:424-425, 755:492-495, 756:577-578, 759:827-829. 9.「先天性股関節脱臼無出血性療法ニ注意に対スル結論(承前)」『医事新聞』761:985-987. 10.「先天性股関節脱臼整復術ニ伴フ危険症状」『医事新聞』764:1227-1228. 11.「理学的療法ノ応用」『京都医学雑誌』5(1):59-66. 12.「ポット氏病於小児肺淋巴腺結核ノX線診断ノ応用(京都医科大学「ヒルゝギシェーオルトペディー」臨床講義)」『東京医事新誌』1553:43-47. 13.「脊髄性進行性筋萎縮及ビ筋性進行性筋萎縮(京都医科大学「ヒルゝギシェーオルトペディー」臨床講義)『東京医事新誌』 1556:53-55. 14.「脳性小児麻痺症 (Infantile Cerebrall_hmung)(京都医科大学「ヒルゝギシェーオルトペディー」臨床講義)」『東京医事新誌』566:67-68. 15.「外鼠蹊歇尼亜(京都医科大学「ヒル、ギシェーオルトペディー」臨床講義)」『東京医事新誌』 1574:93-94. 16.「「オルトペヂー」トハ何ゾヤ」『中外医事新誌』667:13-17, 668:90-96, 669:155-162, 671:316-318, 672:371-373, 674:528-529, 677:743-746, 678:805-807, 680:955-962, 681:1019-1022, 687:1449-1452, 688:1531-1540, 689:1600-1606, 690:1685-1691. 17.「「ラディウム」ニ就テ」『東京医事新誌』1544:1-4, 1550:313-314, 1554:507-508, 1557:643-645, 1570:1273-1275, 1573:1404-1405. 18.「先天性股関節脱臼ニ就テ」(第9回日外総会,抄)『日外会誌』9(1):62-63. 19.「ポット氏病ニ来ル小児肺淋巴腺結核」(第9回日外総会,抄)『日外会誌』9(1):63. 20.「畸形性関節炎ニ就テ」(第9回日外総会,抄)『日外会誌』9(1):64. 21.「「コキサ　ワーラ」ニ就テ」(第9回日外総会,抄)『日外会誌』9(1):65-66. 22.「ポット氏病ニ来ル小児肺淋巴腺結核X線上ノ一補遺」(京都医学会第41回例会[2/15],『京都医学雑誌』5(2):123-124. 23. 河村叶一, 松岡道治「オステオゲネーシス、イムペルフェクタ」ノ一例」(京都医学会第42回例会[3/28],抄)『京都医学雑誌』5(3):93-94. 24. 林喜作,松岡道治. 「畸形性関節炎」(京都医学会第42回例会[3/28],抄)『京都医学雑誌』5(3):94-95.

明治41 (1908)年 続き	25.「原発性胃肉腫」「雑報　京都医科大学の研究事項(題)」京都医事衛生誌』173:16‡. 26.「卵黄管嚢腫ニ因スル臍部脱腸ノ一例」「雑報　京都医科大学の研究事項(題)」『京都医事衛生誌』173:16‡. 27.「「ラデイウム」新元素ノ家兎皮膚ニ対スル作用」「雑報　京都医科大学の研事項(題)」『京都医事衛生誌』173:16‡. 28.「「イシェミー」ニ因テ起ル筋ノ攣縮」「雑報　京都医科大学の研究事項(題)」『京都医事衛生誌』181:9‡. 29.Über einen Fäll von Nabel-Hernia, verursucht durch eine Dottergangszyste. Dtsch Z Chir. 91:189-191. 30.Über die Versteifung der Wirbelsäule. Dtsch Z Chir. 92: 312-322. 31.Über die Radiumverbrennung der Haut. Dtsch Z Chir. 92:570-577. 32. Ein Beitrag zur Röntgendiagnostik der kindlich Lungendrüsentuberkulosa bei Malum Potti. Dtsch Z Chir. 94: 419-426. 33.Über die Osteoarthritis defeomans chronica juvenilis. Dtsch Z Chir. 96:302-312.
明治42 (1909)年	1.「胯内彎症」『日外会誌』9(2･3･4):252-253. 2.「脳性小児麻痺」『日外会誌』9(2･3･4):254. 3.「肺淋巴腺結核ノポット氏病ニ及ボス関係」『日外会誌』9(2･3･4):255. 4.「先天性股関節脱臼」『日外会誌』9(2･3･4):256. 5.「「オルトペジー」トハ何ゾヤ」『中外医事新報』691:92-97, 693:164-176. 6.「細胞の特異性.Ueber der Spezilität der Zellen.」『医海時報』759:32. 7.「臨床上必要ナル脊柱ノ解剖及生理ニ就テ」『東京医学会雑誌』23(4):83-87. 8.「貧血性筋攣縮ト義布斯繃帯」(第10回日外総会,抄)『日外会誌』10(1):16-17. 9.「「オステオプサチローヂス」ノ一補遺」(第10回日外総会,抄)『日外会誌』10(1):25. 10.「結核性脊椎炎ノ標本供覧及ビX光線応用ニ際スル注意」(第10回日外総会,抄)『日外会誌』10(1):33. 11.「硝蒼中毒,血友病,パーゲット氏病ノ実験セシ例.「オステオプサチロージス」患者ノ「デモンストラチオン」」(京都医学会第55回例会,抄)『京都医学雑誌』7:69-70. 12.「畸形矯正及理学療法一般」(京都医科大学医学講習会,題〔42/1/25-2/22〕)『京都医事衛生誌』176:51(明治41年),178:29-30, 180:15-17. 13.「先天性股関節脱臼一百一例ニ就テ」「雑報　京都医科大学の研究事項(題)」『京都医事衛生誌』184:48¶.

明治42 (1909)年 続き	14. Beitrag zur Lehre von der idiopathischen Osteopsathyrosis. Dtsch Z Chir. 98:408-414. 15. Über die Haemophilia spontanea. Dtsch Z Chir. 102: 508-514. 16. Wismutvergiftung nach Injektion. Dtsch Z Chir. 102:508-514. 17. Beitrag zur Lehre von Pagetschen Knochenerkrankheit (Osteomalacia chronica deformans hypertrophica nach Recklinghausen). Dtsch Z Chir. 102:515-521.
明治43 (1910)年	1.「小児外科」『医海時報』818:63-64. 2.「学会彙報　宿題「脊椎カリエス」『日外会誌』11(1):13. 3.「小児外科ニ就テ」(診療雑談　口演大意)『児科雑誌』118:140-145. 4.「跛行ニ就テ」(第15回小児科学会総会演説,題)『児科雑誌』118(総会記事)3. 5.「畸形矯正及理学的療法一般」(京都医科大学第二回講習会〔43/2/1〕)『京都医事衛生誌』188:22(明治42),191:22-23,192:40-41. 6.「現今ニ於ケル医界ノ趨勢」(京都帝国大学第一回講演会,題〔43/8/8-13〕)『京都医事衛生誌』195:19-20. 7.Die praktisch Verwendung der Röntgenstrahlen bei den Erkrankungen und Verletzungen des Knochensystems und Verletzungen des Knochensystems」『日外会誌』11(1):6[§]. 8.Anatomishch-radiologische Untersuchung des kongenital verrenkten Hüftgelenkes.『日外会誌』11(1):8[§]. 9. Berichtüber 700 Fälle von Spondylitis tuberculosa.『日外会誌』11(3):1-13[‡**]. 10. Über Gelenkerkrankungen bei Tabes dorsalis. Dtsch Z Chir. 106: 292-300. 11. Über die Wachstumsanomalie der Tuberositas tibiae in der Adolensens. Zeitschrift für Orthopädische Chirurugie(以下、'Z Orthp Chir.'と略す)27:493-497. 12. Multiple Enchondrome der Knochen. Z Orthop Chir. 27: 499-503.
明治44 (1911)年	1.骨及関節諸疾患ノX線病像」(12回日外総会、抄)『日外会誌』12(1):48-49. 2.「先天性股関節脱臼ノ解剖標本」(第12回日外総会、抄)『日外会誌』12(1):149-150. 3.「膝関節諸疾患ノX線病理」(第12回日外総会、抄)『日外会誌』12(1):151-152. 4.「X放射線応用の進歩」『医海時報』863:50-51. 5.「「オルトペヂー」に就て」(九州沖縄医学会〔3/19〕、題)『京都医事衛生誌』205:19.

明治44 (1911)年 続き	6.「特発性血友病」‖「京都医科大学業績,題」『京都医事衛生誌』205:49-52. 7.「注入後に起る次硝酸蒼鉛の中毒」‖「京都医科大学業績,題」『京都医事衛生誌』205:49-52. 8.「パーゲット氏骨病」‖「京都医科大学業績,題」『京都医事衛生誌』205:49-52. 9.「骨に生ずる多発性軟骨腫」‖「京都医科大学業績,題」『京都医事衛生誌』205:49-52. 10.「脊髄労性骨関節の疾患」‖「京都医科大学業績,題」『京都医事衛生誌』205:49-52.
明治45 (1912)年	1. 松岡道治、林喜作「子宮内ニ発生セル下腿骨折ノ二例」(第13回日外総会,抄)『日外会誌.』13:65. 2. 松岡道治、林喜作「上膊骨下端骨折X線写真示説」(第13回日外総会,抄)『日外会誌.』13:65-66. 3. 松岡道治、林喜作「先天性股関節脱臼整復後骨破砕ト骨切開ヲ施セル二例」(第13回日外総会,抄)『日外会誌.』13:68. 4. 松岡道治,林喜作「先天性股関節脱臼ノ遺伝的関係」(第13回日外総会,抄)『日外会誌』.13:69. 5. 松岡道治,林喜作「先天性股関節脱臼ニ伴フ先天性畸形」(第13回日外総会、抄)『日外会誌』13:69. 6.「輓近ニ於ケル結核性股関節炎療法ノ改善」『日新医学 補修講演』1(2):119-127. 7.「エッキス放射線器械ノ装置及其使用法」『日新医学　補修講演』1(10):107-126. 8.「X放射線学」(京都大学夏季講習会,題〔8/12-17〕)『京都医学雑誌』9(1):118、『京都医事衛生誌』212:28. 9. Hayashi K, Matsuoka M. Anatomische und radiologische Untersuchungen der Knochengerüste der congenital verrenkten Hüftgelenke.Z Orthop Chir. 196-220. 10. Hayashi K, Matsuoka M.Über angeborenen Hochstand der Schulterblätte (ein neuer Fall von doppelseitigen Hochstand). Dtsch Z Chir.113:285-318. 11. Hayashi K, Matsuoka M. Bericht über 700 Fälle von Spondylitis tuberculosa. Z Orthop Chir. 30:381-393**. 12. Hayashi K, Matsuoka M. Ueber intra partum entstandene Unter-shenkelfrakture. Archiv für klinische Chirurgie. 98:417-124.

大正3 (1914)年	1.「膝関節疾患ノ臨床的病理及診断」『臨牀医学』1:1-6. 2.「股関節炎ノ数種」(第13回日外総会、抄)『日外会誌』14:176. 3.「先天性股関節脱臼ノ治療ニ対スル余ノ経験」(第14回日外総会,抄).『日外会誌』14:175. 4.「脳性小児麻痺ニ合併セル先天性股関節脱臼」(第14回日外総会,抄).『日外会誌』14:175. 5.「先天性股関節脱臼」(第14回日外総会、抄)『日外会誌』14:175-176. 6.「結核性股関節炎ノX線ノ一二」(第14回日外総会、抄)『日外会誌』14:176. 7.「股関節炎ノ数種」(第14回日外総会、抄)『日外会誌』14:176-178. 8. Hayashi K, Matsuoka M. Angeborenen Mißbildungen kombiniert mit der kongenitalen Hüftverrenkung. Dtsch Z Chir. 31:369-399. 9. Hayashi K, Matsuoka M. Ueber die Erblichkeit der angeborenen Hüftgelenkverrenkung. Z Orthop Chir. 31:400-423.
大正3 (1914)年	<1月：依願免本官>

注

* 嗝囉仿謨: chloroform(コロロフォルム)。田代義徳訳述.『智児曼氏外科総論　第一』45～78頁、明治30年

† これらの論文の標題は、号を追うとともに「「オルトペヂー」トハ何ゾヤ」などと表わされているものが多い。

‡ これらの論文の掲載誌は未だ見出し得ていない。

§ これらの論文は「第12回日本外科学会次第」には記載されているが、「総会記事」にはその抄録はない。なおこれらと同一の標題を持つドイツ語論文は、執筆時までに特定し得ていない。

¶ この論文は「独乙外科時報　掲載」と記載されているが、『Deutsche Zeitschrift für Chirurgie』にこの論文は見出し得ない。

‖ 『日本外科学会雑誌』第11巻第3号の巻末からドイツ語で印刷されている。

‼ これらの論文について、「内外科時報投書」と注記されているが、執筆時までにその掲載誌を見出していない。

** 文献43-7と45-9とは内容は同一であるが、著者が前者は松岡単独、後者は林、松岡の共著となっているだけでなく、45-9では43-7から図5枚が省かれている。

第三章　松岡道治の学問的背景

松岡道治の学問的背景は、当時先端医療であったエックス線診断学であり、その整形外科学領域への応用がかれ終生の課題であったと思われる。

Würzburg 大学の Röntgen 教授が特異な光線について地元の学術誌へ発表したのは、一八九六（明治二九）年一月のことである。[6] この事実は在独の日本人学者によっていち早く（後藤五郎の推定では二月二〇日頃）[7] わが国に伝えられ、ただちにその追試が次々と行われるとともに、物理学、医学の関係雑誌だけでなく当時の新聞にもおびただしい論文や記事が掲載された。[7][8] 一方欧米では、Röntgen の発見後一年間に一〇四四編の論文が発表されたといわれている。[9] 明治三〇年四月にまず、帝国大学医科大学解剖学教室にエックス線装置が設置された。[10] 医科大学外科教師スクリバ[11]が賜暇帰国あけに本国から持ち帰ったX光線写真器は、明治三一年二月に医科大学第一医院へ備え付けられ、[12] 三月の東京医学会例会でスクリバによって新設器械による人体透視が供覧された。[13]

松岡が帝国大学を卒業して外科学一般特に内臓外科学攻究のため大学院に入学したのは明治三一年六月あるいは七月であるが、[14] このような当時の状況の下にあって、エックス線学に大きな魅力を感じたことは、新進の医学士としては当然のことであったと思われる。[2][3][14]

明治三一年四月に皇太子殿下（後の大正天皇）が帝国大学へ行啓し、スクリバ教師が近藤繁次外科学助教授を通訳としてそのエックス線器械の実験供覧を行った。[15][16] このとき器械の操作は、阿久津三郎、[17] 富田忠太郎、[18] 宮原立太郎、[19] 肥田七郎[20]とともに松岡も務めた。[16] このうち、とくに宮原、肥田の両氏は、後にわが国放射線医学界の先駆者になった人達であって、[16] 卒業直後の松岡もその一員に選ばれたことは、かれのエックス線についての知識、能力がきわめて優れていたことを示すものとして、特記するに値する。

第四章　松岡道治のエックス線診断学へ寄与

明治三二年七月二〇日に、松岡が東京医学会例会で「X線光線ニ就テ」[32・1]と題した発表を行ったが、その内容は今日知り得ない。翌明治三三年の東京医学会例会で「稀有ナル骨折ノ二例」[33・3]を発表し、「嗚呼X光線夫レ如何ナル怪物ゾ」とその効用をたたえた。かれはこの発表で「コンツション」（Kontusion〔挫傷〕）と診断されていた稀な「オレクラノン」骨折と指骨骨折[21]の二例をエックス線写真とともに報告している。

松岡はドイツ留学時、自らエックス線装置（管球）を購入して帰国し、ランプあるいはホヤと呼んで常に手元に置き終生愛用したといわれている[22][23]。明治四〇年夏の比叡山夏季早朝講話[23]では「私は昨年独逸から帰って、京都の大学で研究を致しましたが、自分は多少あちらの人よりも能く写すと云う見込が附いた所から」云々（傍点筆者）と述べている。これだけの自信とそれを裏付ける技術が、明治四四年の独逸語モノグラフ[24]へと発展したものと考えられる。

松岡は京都医科大学整形外科学教室主任になってはじめての日本外科学会（第八回、明治四〇年）において、胃癌に関する演説[40・10]を行ってはいるものの、くる病[40・6]、骨関節結核[40・7]、先天性股関節脱臼[40・8]、さらには脊椎強直（強直性脊椎関節炎）[40・9]など、翌年（第九回、明治四一年）には畸形性関節炎（変形性関節症）[41・20]、股内反[41・21]と、エックス線診断を基本にした整形外科的疾患を続々と報告した。その後明治四四年の第一二回日本外科学会総会において「骨及関節諸疾患ノX線病像」[44・1]という演題で「骨、関節ガX線ニ映ズル像ニ就テ其病理ノ項目」を系統的に分類、整理して発表した。さらに明治四四年[44・4]と四五年[45・7]にエックス線に関する総説を雑誌に発表し、京都医科大学講習会の演題[45・8]にも「X放線学」を選んでいる。

松岡の後期の論文でとくに興味を引くのは『日新医学』「補修講演」に掲載されている「エッキス放射線器械ノ装

置及其使用法」[45-7]である。この論文の始めには「勿論エッキス放射線ハ電気カラ出ルノデアリマスカラ、電気ハドウ云フモノデアルカト云ウコトヲ御話スルノガ一応ノ順序デアリマス。（中略）電気ハドウ云フモノデアルカト云フト、ソレハ分ラナイ。（中略）ケレドモ其結果ハ吾吾ガ研究スルコトガ出来マス」と書かれていて、電気の原理から説き起こしたという松岡の大学での講義[22]を彷彿させるものがある。

松岡は開業後十数年を経た昭和初期においても、松岡病院三宅担医員をして骨関節疾患のエックス線診断に関する論文を三編発表させている[25][26][27]。

このように考えると、松岡の終生の学問的テーマの一つはエックス線を利用した骨関節疾患の診断学であったということができる。京都帝国大学退官後、市中に身を置いてなお、整形外科疾患に対する学究的姿勢が衰えていないことは驚嘆に値することである。

第五章　松岡道治の学術論文

松岡は明治三二年の日本外科学会の創立にさいして、その発起人に名を連ねているが[28]、上述のように論文の発表はその発足の前、帝国大学卒業の翌年から始まっている。

松岡の発表論文は、その初期において当時の外科学（内臓外科学）に関連した標題が少なくないものの、漸次整形外科疾患に関する論題に限定されてくる。さらに松岡の論文の特徴として、長期にわたって、やや不定期に雑誌に連載されたものがいくつかあり、それらの一部は著書（私家本）として後に出版されたということである[29][30][31]。かれの学会口演および雑誌論文発表は表1に見るように、明治四一年が最も多い。また明治四一年以降の日本外科学会では主として教室員林喜作[32]との共著として、また明治四五年以降の独文論文では林を論文の筆頭著者として、それぞれ報告されている。

松岡の論文で注目すべきもののひとつは留学を終え帰朝した直後に発表した「「オルトペディー」の一小史」[39-1]である。この論文によれば、オルトペディー（畸形矯正学）[33]とは、「其原因ノ如何ヲ問ハズ、其組織ノ骨タルト筋タルト神経タルトヲ論ゼズ、人体ノ生理的ヨリ異ナリタル状態ニ就テ講究スル学」を言う。そして畸形とは、「先天性タルト、後天性タルトヲ問ハ」ず、骨折や脱臼などの外傷、急性・慢性の炎症などから発生した四肢、体幹、頚部、胸郭の変形すべてであると定義している。さらにかれはこの論文の中で、畸形矯正学の起源をヒポクラテスに求め、当時の欧州各国の著名な学者、研究室さらには米国の病院にいたるまで、海外の現状を広範に紹介している。なおこの論文は後に、そのまま著書[29]に再録されている。

京都医科大学整形外科開設直後に『大阪毎日新聞』紙上へ掲載されたインタービュー記事[34]によれば、松岡は「整形外科は一名矯正外科と呼び、畸形を矯正して天然の常態に復せしむる療法」であると述べ、わが国で整形外科が進まぬ理由として、整形外科の療法のひとつとして行なう器械療法のための費用が巨額であることを挙げている。

また整形外科患者にたいしては、医師は「親切な相談相手」になるとともに「深き同情を有せねばならぬ」とし、とくに身体障害者にたいして職業訓練を行なう学校[35]の必要性を主張した。

さらに富山県で発見された英吉利病（くる病）の治療は整形外科に属するものであり、東京医科大学整形外科の田代博士が同地に出張された努力を高く評価し、「単に医術として専門家が研究するばかりでなく江湖の識者に社会的、特に人道的事業として観察して貰いたいものである」と述べている。[34]

このように松岡は、自ら主宰する本邦初の整形外科講座発足直後、すなわち今から百年前、今日なお変わらない整形外科学の本質を洞察した見解を発表しているのである。

教室発足後の論文で特記すべき論文は、明治三九年六月一八日、松岡が本邦初の整形外科診療を京都医科大学で開始してわずか一一カ月後に京都医学会第四次総会で発表した「千人以上治療シタル畸形患者ニ就テ」[40-17]である。

この論文では教室開設以来診療した患者千人の疾患の種類とその治療法が述べられていて、その範囲は現在の整形外科診療内容すべてを包括し、さらに、游走腎、（鼠径）ヘルニアのコルセット、ペロッテによる治療にまで言及している。

刮目すべきは、「余ハ如何ナル骨折患者ニ対シテモ決シテ病床ニ臥セシメルコトナク必ズ患肢ヲ義布斯繃帯ニテ固定シ日常ノ職業ニ就シム」と述べ、今日の骨折治療原則を当時すでに確立していたことである。

また先天性股関節脱臼の非観血的治療については、「余ガ「クリニック」ニ於テハ益々其ノ技能ヲ高メ二一歳以上ノ者ニスラモ行エリ」と述べている。

さらに神経疾患については、「余ガ「クリニック」に於ケル材料ノ大部分ヲ占ム」とし、「痙攣性或ハ麻痺性攣縮ヲ有セル疾患ニ向イテハ腱或ハ神経ノ手術ヲ要スルハ勿論ナリ、此観血的手術ノ外ニ左ノ条項ニ注意スベキモノトス」として、皮膚摩擦、温浴、熱気浴などを合わせて勧めている。このことから、単に骨関節の局所的〝畸形〟疾患の治療だけでなく、脳脊髄疾患をも包含する運動器疾患全体にたいする観血的、非観血的治療を視野に入れた整形外科を松岡は目指していたことが分かる。

第六章　学会発表とその評価

松岡の業績のうち学会発表には簡単な抄録だけのものが多数を占める。そこで、主に日本外科学会総会の発表論文について、『日本外科学会雑誌』の総会記録記事や当時の医学（商業）雑誌の学会評判記などから、松岡の学会における評価を述べる。

第一回（明治三二年）[32-2]、第二回（明治三三年）[33-1]の日本外科学会総会では、松岡はスクリバの講演の通訳をしていて、

かれのドイツ語の堪能さをうかがい知ることができる。さらにこの第一回総会においては、総会第一席の芳賀栄次郎[36]の「外科的制腐法ニ就テ」という演題[37]に追加発言し、その後も積極果敢に学会で発言した。とくに第八回の外科学会総会では、同じ京都医科大学の外科学教室からの演題[38]にさえも発言している。

松岡の本格的な学会活動は、表1に見られるように教室開講後の明治四〇年の第八回日本外科学会総会からであるが、その頃から総会全体の総演題数も飛躍的に増加している[39]。

第一二回日本外科学会総会（明治四四年）では、骨関節諸疾患のエックス線の病理についての上述の発表[44-1]が参加者も注目を集めた[40]。第一三回日本外科学会総会（明治四五年）においては、田代義徳[41]の「骨折ニ関スル経験」という演題で、肘関節顆節上部骨折（上腕骨顆上骨折）の血性整復（観血的整復）の可否について「終結ニ至ラズシテ壇ヲ下ル」ことになったのに対して、松岡は観血的手術を主張している[42]。ついで一四回日本外科学会総会（大正二年）では、股関節炎に関する一演題[22]と先天性股関節脱臼に関する三演題[23][24][25]を発表していて、「百余枚の鮮明なるX線像、数多のX線連続像を提げて立ち一時間を独占し」たという[43]。

前者の股関節炎の演題[22]については自覚症状の乏しい結核性股関節炎の膿瘍の位置を確かめるには蒼鉛を関節腔内に注射してその流れる方向を見て判断するように勧め、また臼蓋の変化を知るためにトレーネン、フィグール[44]の厚さに注目することを述べている[43]。当時一般に注意を引いていなかった一種の関節造影法や「涙滴」に言及したことは、松岡の卓越した学識を物語るものであろう。

後者の先天性股関節脱臼の諸演説[23][24][25]に関しては、とくに田代の質問に対して「豊富なる実験と深遠なる識見とを以て説く所誠に至れり尽くせり」であったという[46]。

これらのことから言えることは、松岡は日本外科学会総会会場において果敢に追加発言して終始討論を挑んでい

たことである。ことに東大田代教授との討論は吉例になっていたという。[45] しかし一方で、田代は松岡に乞うて先天性股関節脱臼患者の病理標本のギプス模型を作製し、「我大学ノ学生ニ該模型ヲ示ストキハ松岡教授ニ感謝ノ意ヲ表スルノヲ例トイタシテ居ル」[41-2] という関係でもあったのである。[16]

第七章　宿題報告

松岡教授は第一〇回日本外科学会（明治四二年四月）において「結核性脊髄炎七百例ニ就テ」という宿題報告[43-2]を担当した。この論文には、患者の年齢別統計の棒グラフが示されていて、一八～三〇歳に大きな山があるほか、二～五歳という乳幼児期にも山があり、猖獗を極めていた脊椎カリエスの当時の発病状況を如実に表している。本論文には、さらに亀背患者の脊椎、脊髄横断連続病理標本があって、その病変が詳述されている。

この宿題報告は、『日本外科学会雑誌』異例のドイツ語論文として、同誌第一一巻第三号の最終ページから逆に印刷されている。[43-9] なおこの論文は、Hayashi K（林喜作）を筆頭著者とする共著論文として、明治四五年に『Zeitschrift für Orthopädische Chirurgie』へ掲載された。[45-1]

この宿題報告については、「松岡博士の演説は中々堂々たるもので、表や写真図を会場の壁と云う壁全体に貼り付け、其他例のX放線写真を多数に持ち出して、約二時間以上に亘る大演説を試みたるは、我が外科学会の誇りとするに足る」という盛況であったという。[47] さらに、「殊に東大の田代博士と松岡博士との間に行われたる討論は正に斯界の珍である、（中略）彼れ呼び此れ答へ両虎相呼応して、最早論じ尽した後に、演壇上に於ける敵は壇下に於ける無二の親友で、相互に手を握りて打語らう様は誠に外科学会否な第三回日本医学会に於ける最も美しき現象であった」という。[47] この田代教授との討論に関しては、「両博士の間に激烈なる論戦ありて交々自説を主張する毎に拍手盛

んに起り議論は遂に交綏（こうすい。両軍ともに退くこと）に終りしが如きも遂に松岡博士の勝利に帰したるに似たり一時は中々に面白かりき」という記事も見える。[48]

第一四回日本外科学会（会長三宅速九大教授、開催地、京都市）の総会（第三日、大正二年四月三日）において次回総会の宿題に『関節結核』が選ばれ、担当者として東京帝国大学田代義徳教授、九州帝国大学住田正雄教授[49]とともに松岡が指名されている。[50]しかし松岡は、大正二年後半病に倒れて静養し、[51]さらに大正三年一月に京都医科大学教授を辞したので、[3]これに参加することはなかった。大正三年四月の第一五回日本外科学会総会で田代教授は、宿題講演の冒頭に「京大の松岡博士の病の故を以て出席せられざるを惜しむの情を述べら」れ、雑誌記者も「年々論壇上の花形役者たる洛陽の学者を、今日の会場に見を得ざるは亦頗る遺憾とする所也」と記している。[52]

また松岡は、この第一四回総会で三輪徳寛[53]、山形仲藝[54]とともに次期会長予選者に推薦された。[50]三輪は第一五回（大正三年）[53-2]に、山形は第一八回（大正六年）[54-2]に、ともに外科学会総会会長を務めているので、松岡も大正三年に辞任していなければ、遅からず日本外科学会会長を務めていたことは疑いのないところである。

第八章　学位論文

松岡の学位論文は以下の六編であって、留学中の明治三八年七月一二日に文部省から授与された。[55]

一、胎児ノ骨病論増補[37-2][38-1]

二、骨折後軟骨再生ノ意味ニ就テ[36-2][38-2]

三、家兎ノ尾椎骨ニ人工的ニ生セシメタル後彎ニ於ケル組織変化ニ就テ[37-1][38-3]

四、「アダマンチノーム」（Adamantinam）[ママ]論増補[37-4][38-4]
五、悪性腫物ニ因スル骨組織ノ消失[37-3][38-5]
六、軟骨ノ再生機能[37-6][38-6]

これら学位請求論文は明治三六（一九〇三）年から三七（一九〇四）年に集中して発表された論文で、二、四、五は東京帝国大学時代（肩書きは「助手」あるいは「前助手」となっている）の、一、三、六はゲッチンゲン大学病理学教室での研究である。

なお、これらのうち一から四までの表題のあとにはとくに（独文）と付記されているが、注記のない五、六の論文を含めて、すべて独文で発表されている。（独文）と付記されていない論文（五、六）の和文論文は未だ発見し得ていない。

なお松岡と同日に学位を授与されたものは他に七名あり、そのなかには志賀潔[36]、林春雄[37]、緒方正清[38]らがいる。

第九章　むすび

松岡道治が明治三一（一八九八）年帝国大学医科大学を卒業して以来、大正三（一九一四）年一月に京都帝国大学教授を辞任するまでの一六年間に発表した学術論文を著者は渉猟し、少なくとも邦文論文一三三標題、一九一編、ドイツ語論文三一編を確認することができた。これらの諸論文は骨関節疾患、とくに先天性股関節脱臼や骨関節結核に関するものが多く、いまだ整形外科学講座が東西両帝国大学にしか設置されていなかった明治末期に、日本外科学会、京都医学会などの関係諸学会や当時の医学雑誌を舞台にした松岡の活動、なかでも骨関節疾患のレントゲン診断学、さらに先天性股関節脱臼、骨関節結核に対する治療学についての先駆者的活動は、当時の諸医学会を活

性化し、また医療界に裨益するところが多大であったと考えられる。

稿を終わるにあたり、日本医史学会前理事長・蒲原宏先生、福岡整形外科病院顧問・小林晶先生のご教示と、京都ドイツ文化センター、日独協会、京都大学医学図書館、京都府立医科大学図書館の職員各位のご協力に深謝する。

注記と引用文献

（1）廣谷速人「京都大学整形外科学教室初代教授　松岡道治の事績、業績　第一報　京都大学整形外科教室の創立」『日本医史学雑誌』五一巻、第三号、三八五～四〇六頁、平成一七年

（2）内藤一男「松岡道治先生の思い出」京都大学医学部整形外科学教室編『京都大学医学部整形外科学教室　開講八〇周年記念誌』六～一五頁、京都大学医学部整形外科学教室、昭和六一年

（3）「松岡道治履歴書」天児民和九州大学名誉教授へ送付された内藤一男先生の資料・私信、小林晶、平成一五年一一月一四日

（4）『東京帝国大学一覧　従明治三一年　自明治三二年』（第二一章　学生及卒業生　医学士）　四七二頁。明治三二年

この公式記録によると、松岡の名前は明治三一年七月卒業生のなかにある。履歴書（2、3）では、明治三一年一月に副手を嘱託され、五月に助手に任命され、さらに六月には（助手の身分のまま?）大学院へ入学したことになっている。当時は卒業試験が長期間（六カ月）にわたって実施されていたようで、松岡自身は明治三〇年一二月に卒業試験すべてに合格し外科学教室へ入局したものの、その学年全員が卒業試験に合格し全員が卒業証書を授与されたのは、明治三一年七月であったとものと考えられる。

（5）「〔一〕舎報　夏学期開講（内外雑報）」（『済生学舎医事新報』八八号、三七五頁、明治三三年）によると、留学する田代

義徳講師の後任であった。

（6）Röntgen WC. Über eine neue Art von Strahlen（Vorläuftige Mitteilung）. Sitzber Physik-Med Ges Würzburg. 132-141, 1895. および「付録3．新しい種類の線について」山崎岐男　『X線の発見者　レントゲンの生涯』（W.Robert Nitske. The Life of Wilhelm Conrad Röntgen, University of Arizona Press, Tucson, Arizona.1971）付一八～付一三頁、考古堂、新潟市、平成元年

（7）後藤五郎「明治二九年（一八九六）」後藤五郎編『日本放射線医学史考（明治大正編）』五～一三頁、日本放射線学会、昭和四四年

（8）後藤五郎「本邦日刊新聞に報ぜられたレントゲン線の発見」『臨床放射線』八巻、三〇八～三一二頁、昭和三八年

（9）History of Radiology. Physical Diagnosis:Medical Instrumentation. Norman JM. Morton, Medical Bibliography. 5th Ed., Scolar Press, England, 1983.

（10）後藤五郎「明治三〇年（一八九七）」文献（7）、一七～一九頁

（11）ユリウス、スクリバ（Julius Karl Scriba[1]．一八四八年～一九〇五年）ヘッセンに生まれハイデルベルグ大学で医学を修め、普仏戦争に軍医補として従軍した後復学し、明治七（一八七四）年に医師資格（ドクトル　メヂチー子〔ハイデルベルク〕）を取得した。[2]明治一三（一八八〇）年、教授資格取得論文を完成させている。[2]明治一四（一八八一）年六月来日、帝国大学外科教師[3]として医科大学第一医院に勤務して、外科学、外科臨床講義、裁判医学、皮膚科学及黴毒学、眼科学を担当し（明治二二年以降は前二科目だけ）、多くの人材を育てて日本の外科学の基礎を築くために尽くし。[4]とくに当時の先端医療であったリスターの石炭酸防腐法と創傷療法をわが国に導入して外科的伝染症を一掃した。[6]

京都医科大学第一外科学講座猪子止戈之助教授（帝国大学明治一五年卒業）は、スクリバ先生は「余リ弁舌ハタヽヌガ、手術ハ大変楽ニヤッテノケ、手術中ニ怒鳴ルコトモナク、少シモ周章ル様子ガナイ。コノ先生ノ手術ヲ見テ自分ハ再ビ外科ヲヤリ度クナッタ」と回顧している。[6]しかし明治三二年当時、スクリバ自身は、外科を志望するものが少なく「近来助手がないので困っている」と、新聞記者に語っている。[7]

明治三二年第一回日本外科学会総会において、学会最初の名誉会員に推薦され[8]、明治三四（一九〇一）年職を退いて東京大学から名誉教師の称号を贈られた[4]。明治三五（一九〇二）年からは新設された聖路加病院の外科医長として活躍したが[1]、明治三八（一九〇五）年、鎌倉で糖尿病に肺結核を併発し、ベルツに看取られて死去した[9]。

①自著の論文では「J. Scriba」としている。たとえば、Deutsche Zeitschrift für Chirurgie 二二巻（一八八〇年）には「Mittheilungen aus der chirurgischen Universitätsklinik des Prof. Dr. J. Scriba in Tokio, Japan」という標題のもとに三編の論文を発表している。すなわち、かれは middle name をあまり記していない。②蒲原宏「スクリバ博士の外科学系譜の疑義の訂正」『日本医史学雑誌』四七巻、五七六～五七七頁、平成一三年　③「教授及教師」『帝国大学一覧』（第六章　医科大学　第一　職員）七九頁、明治二二年　④津山直一「東京大学医学部外科学教師　ドクトル・ユリウス・カール・スクリバ　―日本外科学の開祖―」『Die Brücke』（日独協会機関誌）二〇〇〇年、三月号、四頁、平成一二年　⑤「本会の名誉会員第一号、スクリバ」（第一回総会）『日本外科学会雑誌』一〇一巻臨時増刊号二〇〇〇年、二九頁、平成一二年　⑥吉田久士、村上治朗「猪子先生喜寿祝賀会記事」『日本外科宝函』一四巻、一号、二七三～二八六頁、昭和一二年　⑦「雑報　スクリバー氏」『医海時報』二七一号、六六九頁、明治三二年　⑧「名誉会員推選」（開会記事）『日本外科学会雑誌』第一回、四九八頁、明治三二年　⑨笠原道弘「ベルツ先生の物語」http://med.main.teikyo-u.ac.jp/lab/kasahara/baelz13.htm　平成一七年七月二一日現在

(12)「雑報　レントゲン放線器の備付」『医海時報』一九五号、一四三頁、明治三一年

(13)「雑録　東京医学会例会　リョントゲン氏線実験　名誉会員教師　スクリバ君」『東京医学会雑誌』一一巻、六号、三〇六～三〇七頁、明治三一年。および「雑報　レントゲンX光線器の「デモンストラチオン」」『東京医事新誌』一〇四一号、五〇九～五一〇頁、明治三一年

(14)「人事彙報　医学士松岡道治氏」『中外医事新報』四三九号、九三三頁、明治三一年

(15)「雑報　皇太子殿下大学行啓」『東洋学芸雑誌』一五巻、二〇一号、二九七～二九八頁、明治三一年。および土肥慶蔵「放射線療法の三十年」『日本レントゲン学会雑誌』第七巻、第二号、九九ノ一～九九ノ三〇頁、昭和四年

（16）今市正義、原三正　「本邦におけるX線の初期実験　日本放射線技術史考　I」『科学史研究』一六号、一三三～三二頁、昭和二五年

（17）阿久津三郎（明治六〔一八七三〕年～昭和七〔一九三二〕年）[1]福島県の菅野家に生まれ、明治二七年阿久津家の養子となる。[1]明治三一（一八九八）年（東京）帝国大学卒業、ただちに外科助手となり、二年後順天堂医院（現・順天堂大学医学部附属順天堂医院）で泌尿器科を担当する。[2]明治三四（一九〇一）年ドイツに留学して泌尿器科学を学び、[2]順天堂医院の初代泌尿器科医長として活躍した。[1][2][3]大正四（一九一四）年開業。[2]日本泌尿器学会の創立者のひとりで、第二代会長（大正三年～四年）、同学会名誉会員。[1]泌尿器科学の著書が多数ある。[1]

①大矢全節『泌尿器科学史』（第XIII章、I日本泌尿器学会創立当時）四七八～四八九頁、思文閣、昭和一三年　②「阿久津病院長医学博士　阿久津三郎君」湯浅洗身『日本医事大鑑』（第一編　医学編、第六章　現代医界の盛観　二　臨床医学界）一〇八～一〇九頁、日本医事大鑑刊行会、昭和三年　③「泌尿器科学の挑戦譜　第三回」Organon Urology Academia. http://oua_organon.co.jp/hinyou3.html　平成一七年七月二九日現在

（18）富田忠太郎（明治二〔一八六九〕～昭和一六〔一九四一〕年）金沢市出身。東京帝国大学を明治二九年に卒業して陸軍軍医となり、日清・日露戦争に応召、明治三九年休職となって、独、墺へ留学した。[1]明治四一年二月区立新潟病院外科医長となり、[2]明治四三年四月新潟医学専門学校（現・新潟大学医学部）発足とともに外科医長、付属病院長などを務めたが、明治四四年五月辞職して、[2]三重県私立羽津病院長を経て、大正三年に名古屋市西区で開業した。[1]その令名は海外へも喧伝されたという。[1]明治三三年好生館医事研究会で発表したとされる兵士の銃創のエックス線写真[4]が子孫の手によって、東京大学小石川分館に寄贈されている。[5]

①井関九郎「富田忠太郎、野口雄三郎」（外科）『批判研究　博士人物　医科篇』三一二～三一三頁、発展社出版部、東京、大正一四年　②「沿革略」新潟医学専門学校編『新潟医学専門学校一覧　明治四三年四月—明治四四年一二月』一～一〇頁、新潟医学専門学校、明治四四年　③「一・医学部前史」（第一章　新潟大学への道　第二節　大学前史その二）文献（18）②、六～二〇頁、昭和三七年　③後藤五郎「明治三三年（一九〇〇）」文献（6）二八～三一頁

⑤　藤尾直史「東大総長と学際標本・美術・建築学際ものづくりの史的プロセス」Ouroboros　九巻、二号 http://www.u-tokyo.ac.jp/museum/ouroboros//09_02/ke_17.html　平成一七年七月二一日現在

(19) 宮原立太郎（明治一一〔一八七八〕～昭和一一〔一九三六〕年）[1]千葉県出身、明治三四年一一月千葉医学専門学校（現・千葉大医学部）を卒業、[2]明治三五年に東京帝国大学内科介補となり、[2]明治三八〔一九〇五〕年から四〇〔一九〇七〕年まで北米へ留学、[3]野口英世と生涯の友（義兄弟）となる。[1]帰国後、芝愛宕町に病院を開業し、高価なエックス線器械を購入した。大正一一年医学博士、同一四年には日本レントゲン学会において評議員に就任した。晩年、虚弱児童養護協会を設立して結核予防のために尽くしたが、[4]長年のエックス線暴露のため右中指に癌を発症し、右腕と左二指を失って昭和一一年死去し、日本のホルツクネヒトと言われた。[5][7]享年五九歳。

①「宮原立太郎　放射線医療の夜明け　命を捧げて尽力した医学者の生涯」『iStyle 人物伝』iStyle 市民グラフ・いちはら。二〇〇三年春第一〇五号 http://city.ichihara.chiba.jp/graph/Ichihara0304/jinnbutsu/平成一七年七月二九日現在　②「第七章　卒業生」『千葉医学専門学校一覧　自明治四四年　至明治四五年』二〇七頁、千葉医学専門学校、明治四五年　③後藤五郎「明治三五年（一九〇二）」文献（6）三八頁　④「宮原立太郎」http://www.ichihara-chb.ed.jp/board/culture/f/i_f_161_miyahara.htm　平成一七年八月二一日現在　⑤ Holzknecht, Guido（1872-1931）ウイーン大学放射線科教授。藤浪剛一慶応大学教授などわが国放射線医学先駆者の師。放射線障害のため上肢を切断した後、癌転移のため死去した（大場覚「放射線医学の開拓者ホルツクネヒトの記念碑」ECR 2003 http://schering.co.jp. medical/voln/ erc2003/pdf/03ECR_05.pdf　平成一七年八月二一日現在

(20) 肥田七郎（明治一一〔一八七八〕年～昭和一一〔一九三六〕年）陸軍軍医正。明治四一（一九〇八）年陸軍軍医学校教官、X光線学担当、理学的治療講座担当、[1]明治四三（一九一〇）年同校にエックス線装置を輸入設置したときの主任で、[2]大正二（一九一三）年同校において肥田はラジウムを購入して治療を開始した。[3]大正三年第六師団（熊本）軍医部長に転出した。[4]大正四年に予備役編入、東京で開業した。[5]同年、放射線医学専門誌の嚆矢『医理学療法雑誌』の編集者となるとともに、[5]第一六回日本外科学会総会（大正四〔一九一五〕年）で宿題報告を行った。[5][6]大正一二（一九二三）年の日本レン

トゲン学会の創設にさしては発起人として尽力したが、[7] 同年エックス線障害のわが国第一号[8]として慢性骨髄機能不全のため死亡した。

①後藤五郎「明治四一年（一九〇八）」文献（6）六二～六六頁　②後藤五郎「明治四三年（一九一〇）」文献（6）七二～七七頁　②後藤五郎「大正二年（一九一三）」文献（6）一〇二～一一一頁　④後藤五郎「大正三年（一九一四）」文献（6）一一二～一一七頁　⑤後藤五郎「大正四年（一九一五）」文献（6）一一八～一二九頁　⑥肥田七郎「外科ニ於ケル「レントゲン」線」『日本外科学会雑誌』一六巻、一号、一六六～一七七頁　⑦後藤五郎「大正十二年（一九二三）」文献（6）二〇九～二二八頁　大正四年」　⑧舘野之男　「医療分野での放射線防御　X線の診断利用を中心に第一回　皮膚と血液」FB News 三二八号、五～九頁、平成一六年　http://www.c-technol.co.jp/pdf/328fbn.pdf　平成一七年七月二九日現在

(21) 指骨骨折　付図のエックス線写真を見ると、小指基節骨の骨端軟骨損傷で、現在の Salter-Harris 分類によれば、その第二型と思われる。

(22) 瀬木嘉一「（二三）日本での診療レントゲン装置設備（一八九八）」『科学の使徒・レントゲン』六二～六六頁、Xレイ・ジャーナル、昭和四六年

(23) 松岡道治「人体を透視する方法」『叡山講演集』一～一五頁、大阪朝日新聞社、大阪、明治四〇年

(24) Matsuoka M.『Atlas der angeborenen Verrenkung des Hüftgelenks』Archiv und Atlas der normalen und pathologischen Anatomie der Typischen Röntgenbildern. Bd 24, 1911.

(25) 三宅坦「下駄履キノタメニ屢々起ル第V蹠骨凸起部竝ニ基底部骨折ニ就キテ」『日本外科宝函』一一巻、二一四～二三一頁、昭和九年

(26) 三宅坦「先天性股関節脱臼ノ骨盤骨ニ就キテノレントゲン像ノ研究」（ドイツ語論文 Miyake, Hiroshi. Röntgenologisches Studium über die Beckenknochen bei angeborener Verrenkung des Hüftgelenkes).『日本外科宝函』第一一巻、三五五～四六九頁、昭和九年[1]

①この論文によれば、松岡外科病院では一八年間に一三八八例の先天性股関節脱臼を治療していて、整復症例の年齢は三カ月から三五歳に亘っている。なおこの論文によって三宅は名古屋医科大学から昭和九年八月医学博士の学位を授与されている（国会図書館、博士論文検索。平成一七年七月一九日現在）。

(27) 三宅坦「仙椎ノ腰椎骨化セルレントゲン線所見」（ドイツ語論文 Miyake, Hiroshi. Röntgenbefunde bei sakraler Lumbarization）『日本外科宝函』一一巻、四七〇～四七九頁、昭和九年

(28) 発起人名（創立記事）『日本外科学会雑誌』第一回、四八八～四九〇頁、明治三二年

なおここでは「松岡道次」となっているが、日本外科学会員名簿[1]には松岡姓は松岡道治しかなく、同様な誤りは他にもあり[2]、明らかな誤植と考えられる。

①「日本外科会員名簿」『日本外科学会雑誌』一回、三頁、明治三二年　②菅野弘一「明治三十四年ニ於ケル京都ノ医事衛生」『京都医事衛生誌』九四号、三～五頁、明治三五年。この論文の三月の項に「東京帝国大学医科大学助手松岡道次、氏ハ京都帝国大学医科大学助教授ニ任ゼラル」と書かれている（傍点筆者）

(29) 松岡道治　『先天性股関節脱臼及ビ其跛行療法』松岡道治（発売所　丸善株式会社、東京）明治四三年。（昭和五九年、大阪市立大学教授　島津晃教授によって復刻）

(30) 松岡道治　『人體畸形矯正学』松岡道治（発売所　丸善株式会社、東京）明治四三年

(31) 松岡道治　『骨及ビ関節ノ結核』松岡道治（発売所　丸善株式会社、東京）明治四三年

(32) 林喜作　文献（1）「注記と引用文献」（41）

(33) 松岡は留学時[2][3]に命じられた「矯正外科学」という名称に生涯こだわっていたようである。このことは、教室創設直後の諸[41][41][41][41]論文やその著書名[28]、さらには大正四年四月二二日の開業にさいしての新聞広告に「開院　外科一般　矯正外科　松岡病院」と書かれていたことなどから、うかがうことができる。

なお松岡のドイツ語論文の肩書は、常に“Aus der chirurgisch-orthopädischen Universitätsklinik des Dr. Matsuoka, Kyoto, Japan”と記されており、松岡在職中に京都医科大学で購入されたと思われるドイツ医学雑誌の裏表紙には“Chirurgisch-

Orthopaedische Klinik der Kaiserich-Japanischen Univer-sitaet zu Kioto"というゴム印が押されている。さらに、この強い主張は少なくとも昭和初年まで続いていたという確聞がある。

そもそも「整形外科」という診療科名は、東京帝国大学医科大学田代義徳教授によって講座開設に際して新たに創られたものであって、[2] その開設前は「矯正外科」と称していたようである。[3] ちなみに、明治三三年田代が文部省留学生として独墺へ留学するさいは「外科的矯正術研究のため」[4]となっている。

①「開院広告」『大阪毎日新聞』大正四年四月一二日号、四頁　②田代義徳「整形外科ノ説」『日本医事週報』六一六号、明治四〇年　なお蒲原宏「整形外科ノ説」（「Ⅸ　近代整形外科の受容と定着」『整骨・整形外科典籍大系一三（解題・年表―日本整形外科前史）』オリエント出版、大阪、昭和五九年）の六三六～六四一頁）に全文が紹介されている。③「雑報　矯正外科学講座」『医海時報』六二六号　六五三頁、明治三九年（六月一六日号）によれば、「東京医科大学に新設される矯正外科学講座は、目下の外科教室を差繰り愈々来る九月より開講さるゝ事となり」と報じられている（傍点筆者）。なお実際の開講は一〇月であった。④蒲原宏　「日本整形外科史における田代義徳先生―その父たるものの条件―」『整形外科』二六巻、九〇一～九〇六頁、昭和五〇年

(34)「畸形を矯正する新療法（整形外科の開始）」『大阪毎日新聞』明治三九年六月二四日号、七頁

京都医科大学で整形外科学講座が発足した際、松岡は矯正外科学講座という名称に固執して、講座名が東西両大学で異なることに文部省が困惑したという風聞が、京大内部で過去流布されたことがある。しかしこの記事で明らかなように、松岡は講座発足当時から「整形外科」という呼称を是認していたことが分かる。

(35) これらの文面からすると、松岡は米国ニューヨーク市の Hospital for Ruptured and Crippled（現・Hospital for Special Surgery）[1]を訪れたものと考えられる。

①Wilson PD, Levine DB. Hospital for Special Surgery. A brief review of its development and current position. Clinical Orthopaedics and Related Research. 374: 90-106, 2000.

(36) 芳賀栄次郎（元治一〔一八六四〕年～昭和二八〔一九五三〕年[1]　明治二一（一八八八）年帝国大学医科大学卒業して陸

軍に入り、明治三一（一八九八）年自らエックス線装置を購入して東京軍医学校へ設置し、[2]明治三七（一九〇四）年日露戦争にさいして第四野戦病院へエックス線装置を設置した。これは世界で始めての軍陣使用である。[3]明治四四（一九一一）年には第一二回日本外科学会会長を務めた（①）。大正四（一九一五）年、陸軍軍医総監。

①「第一二回総会（一九一一〔明治四四〕年）」文献（11）⑤、七八～八一頁　②館野之男「X線装置年表」明治―医用画像電子博物館　http://www.jira-net.or.jp/vm/various3.html　平成一七年一一月一八日現在　③「各時代の主な出来事　明治」明治―医用画像電子博物館　http://www.jira-net.or.jp/vm/chronology1.html　平成一七年一一月一八日現在

（37）「総会演説」『日本外科学会』一巻、一～一五頁、明治三二年

（38）鳥潟隆三[1]「洞腹的脊椎骨露出術」『日本外科学会雑誌』三巻、一号、四九頁、明治四〇年

一九〇六（明治三九）年の Müller の報告[2]を模擬して、ポット氏亀背を有し流注膿瘍を持つ二例の脊椎カリエス患者に洞腹的（transperitoneal, 経腹膜的）に手術し、一例は全治、一例は其結果不良であったという鳥潟の報告に対して、松岡は「小児に対しては、機械的療法の卓効あることを記憶すべし」と発言している（筆者注：鳥潟の発表症例には年齢の記載はない。また本報告はカリエスに対する本邦最初の手術例と考えられる）。

①文献（1）の「注記と引用文献」（44）参照　② Müller W. Transperitoneal Freilegung der Wirbelsäule bei tuberkulöser Spondylitis. Deutsche Zeitschriftt für Chirurgie. 30: 128-135, 1906.

（39）日本外科学会の口演演題数は、第一回（明治三二年）四五題、第二回（明治三三年）三〇題、第三回（明治三四年）三六題、第四回（明治三五年）三八題、第五回（明治三六年）四二題、第六回（明治三八年）二四題、第七回（明治三九年）一七題に対して、第八回（明治四〇年）は五〇題、第九回（明治四一年）は四八題と第八回以降急速に増加し、[1]討論にも活気が出てきたと評されている。[2]

①「増え続ける演題数に歯止め。次回総会より、演説は六〇題に絞ることに決定」文献（11）⑤、一一二頁　②「学会雑観（三日まで）」『医海時報』六六八号、四〇八～四〇九頁、明治四〇年

(40)「各学会総会記　日本外科学会」『医海時報』八七六号、六一九～六二〇頁、明治四四年
(41) 田代義徳　文献（1）「注記と引用文献」（20）
(42)「総会記事」『日本外科学会雑誌』一三巻、六六～六七頁、明治四五年
(43) G.G.生「第一七回日本外科学会　第二日（四月二日）」（各学会演説摘録（承前））『医海時報』九八一号、七二三～七二五頁、大正二年
(44) トレーネン、フィグール　Thränenfigur（teardrop）涙滴（像）。[1] 一九〇五年 Köhler によってはじめて記載された[2]股関節エックス線像の所見で、腸骨陰影と恥骨・坐骨陰影の移行部から下方に見られるU字型の陰影をいい、その外側は寛骨臼底に、内側は小骨盤壁に、それぞれ一致する。Köhler は、あたかも落下水滴、あるいはいわゆる Glasthräne（溶融ガラスを水中に滴下して出来るかたまり）のように見えることから、Köhler はこれを Thränenfigur, Thränenzeichung と名づけた。

現在では学生を対象とする整形外科学の教科書にもその説明があるが[3]、本邦におけるこのエックス線像の研究論文は、高木（大正九年）がこの像を「涙痕」と名づけて報告するまで待たねばならなかった[4]。その外側縁と大腿骨骨頭との距離を計測することによって、大腿骨頭のわずかな外方転位を知るほか、関節液の貯留や滑膜の肥厚を推測することができるとともに、その消失によって腫瘍の転移を予想することができる[5]。

①従来日本整形外科学会では「涙痕（像）」[4]、日本放射線医学会では「涙滴（像）」と訳していたが、筆者の提案によって、前者は平成一八年発行の『整形外科学用語集（第六版）』で後者の訳語に従うこととなった。②Köhler A. Die normale und pathologische Anatomie des Hüftgelenks und Oberschenkel in röntgenologischer Darstellung. Archiv und Atlas der normalen und pathologischen Anatomie der typischen Röntgenbildern. Bd 12,1905. ③松野丈夫「一・単純X線像」鳥巣岳彦、国分正一、中村利孝、松野丈夫編『標準整形外科学』（第五編　疾患各論　二八・股関節　股関節の診断と検査　三・画像診断）第八版、四八一～四八二頁、平成一四年　④高木憲次「骨盤X線影像ノ研究」『東京医学会雑誌』三四巻、七八三～七九三頁、七九五～八三九頁、大正九年　⑤多田信平「Teardrop figures」『放射線

医学　博識用語辞典　放射線診療こぼれ話』第二版、二二八～二三〇頁、日本医事新報社、平成一四年

(45) 潮州生「京土産　学会雑談」『医海時報』九八一号、七二八～七二九頁、大正二年

(46) 田代義徳「第二二回日本外科学会第四五席演説に対する"追加"」『日本外科学会雑誌』二二回、一一一頁、大正一〇年

(47) 「学会見聞録（一）」『医海時報』八二五号、六一三～六一五頁、明治四三年

(48) 「外科　大阪に於ける日本医学会　第三日　同三日」『京都医事衛生誌』一九三号、六〇頁、明治四三年

(49) 住田正男[1][2]（明治一一〔一八七八〕年～昭和二一〔一九四六〕年）　明治三五年東京帝国大学医科大学卒業。明治三九年京都帝国大学福岡医科大学助教授となり、明治四五年七月九州帝国大学医科大学教授に任ぜられ、九州初の整形外科学講座を開設した。

①天児民和「住田正雄教授整形外科を育てた人達（第一〇四回）」『臨床整形外科』二七巻、七〇四～七〇六頁、平成四年（天児民和『整形外科を育てた人達』四二〇～四二三頁、九州大学医学部整形外科学教室、福岡市、平成一一年）

②小林晶「九州における近代整形外科の祖、住田正雄（一八七八―一九四六）の生涯」『日本医史学会雑誌』四五巻、五六三～五八四頁、平成一一年

(50) 「第一四回総会記事」『日本外科学会雑誌』一四巻、一号、一～一〇頁、大正二年

(51) 「雑報　松岡教授退隠説」『医海時報』一〇一八号、二三三頁、大正二年

(52) 「第四回日本医学会各分科会演説摘録（承前）第五分科会日本外科学会（続）」『医海時報』一〇三四号、七二〇～七二二頁、大正三年

(53) 三輪徳寛（安政六〔一八五九〕年～昭和八〔一九三三〕年）　明治一九（一八八六）年帝国大学医科大学卒業、明治二二（一八八九）年第一高等中学校医学部教諭となる。[1] 大正三（一九一四）年千葉医学専門学校校長となり、大正一二（一九二三）年大学昇格とともに千葉医科大学学長となり、翌年退官した。大正三（一九一四）年第一五回日本外科学総会会長を務めた。[2]

①「第一外科教室史」（臨床医学教室史）千葉大学医学部創立八十五周年記念会編集委員会『千葉大学医学部八十五年

史』三七三～三八一頁、千葉大学医学部創立八十五周年記念会、昭和三九年　②「第一五回総会（一九一四〔大正三〕年）」文献（11）⑤、八六～八九頁

（54）山形仲藝（安政四〔一八五七〕年～大正一二（一九二三）年）　明治一四（一八八一）年帝国大学医科大学卒業。ただちに岡山県医学校に赴任し教諭兼一等医、ついで医学教頭、副院長に任命されて外科学を担当した。明治二一（一八八八）年、第二高等中学校医学部の開設に当たって医学部長兼宮城県病院長、明治三四〔一九〇一〕年仙台医学専門学校設立とともに学校長となる。明治四五〔一九一二〕年東北帝国大学附属医学専門部主事、大正四（一九一五）年、東北帝国大学医科大学設置とともに外科学教授兼初代医科大学長に任命された。大正七年六十歳を期に自ら退任し（当時定年制はなかった）、名誉教授の称号を贈られた。[1] 在任中の大正六（一九一七）年に第一八回日本外科学会総会会長を務めた。[2]

①「山形仲芸」（第二部　岡山大学医学部沿革史　第五章　岡山県医学校　一、医学教場から医学校と改称）岡山大学医学部百年史編集委員会『岡山大学医学部百年史』一五六～一五七頁、昭和四七年　②「第一八回総会（一九一七〔大正六〕年）」文献（11）⑤、九四～九五頁

（55）「雑報　医学博士論文の細目」『東京医事新誌』一四一九号、一四二四～一四二五頁、明治三八年。「○学事　○学位授与」『官報』六六一一号（明治三八年七月一四日）、五九八～五九九頁

（56）志賀潔（明治五〔一八七二〕年～昭和三二〔一九五七〕年）　帝国大学卒業（明治三〇〔一九九七〕年）後ただちに伝染病研究所（所長・北里柴三郎）へ入り、明治三〇（一八九七）に赤痢菌（A群赤痢菌 Shigella dysenteriae）を発見。大正九（一九二〇）年慶応大学教授、同年朝鮮総督府病院長兼京城医学専門学校校長、昭和四（一九二九）年京城帝国大学総長を歴任。昭和一九（一九四四）年文化勲章受賞。

（57）林春雄（明治九〔一八七四年〕～昭和二七〔一九五二〕年）　松岡とは帝国大学の同級生である。明治三八年、ドイツ留学から帰朝と同時に京都医科大学福岡医科大学教授となり、明治四二年東京医科大学薬理学第二講座の初代教授に転任した。その後伝染病研究所長、医学部長を歴任、昭和一二年初代逓信病院院長、同一三年には国立衛生院初代院長となり、同年勅選貴族院議員となる。熱心な脚気伝染病説論者であった。[1][2]

①林春雄。「脚気の研究に就て」（第四回日本医学会総会演説〔大正三年四月一日〕）『医海時報』一〇三二号、六三四～六三六頁、大正三年。および「脚気ノ研究」（無髪生記）『医事新聞』九〇〇号、六〇一～六〇五頁、大正三年　②志賀潔「林春雄君と脚気の原因に就いて」『医海時報』一〇三四号、七一四頁、大正三年

（58）緒方正清（元治一〔一八六四〕年～大正八〔一九一九〕年）明治二〇年東京大学医学部別科を卒業し、緒方洪庵の四女の夫・拙斎の養子になり緒方姓を名乗る（旧姓中村）。翌年ドイツ、フランス、イタリアへ留学、明治三八年大阪市に産婦人科病院緒方病院を設立した。明治四三年、第三回日本医学会（大阪市）の準備委員長を務め、大正二年には大阪府医師会初代会長を務めた。産婦人科産科に関する多数の著書、訳書があり、大阪と日本の医学会に大きな足跡を残した。明治四四年「産婆の代わりに助産婦と命名すべし」と講演し、これが〝助産婦（助産師）〟という呼称の始まりであるという。[1]

①竹村喬「大阪母性衛生学会　四〇年の歩み」http://www.bosei.eisei.org/oosaka-bosei.ht 平成一七年九月二八日現在

Prof. Michiharu Matsuoka, Founder of the Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto University. Achievements in Japanese Orthopaedic Surgery (Part 2:Articles written by Prof. Matsuoka)

Hayato HIROTANI

Prof. Matuoka's professional activities began in 1898 at the Imperial University of Tokyo and extended to 1914, when he resigned his position as a professor of the Department of Orthopaedic Surgery, College of Medicine, Kyoto Imperial University. During these 16 years, he published 191 articles (on 133 topics) written in Japanese and 31 in German. His achievement focused on the x-ray diagnosis of musculoskeletal disorders, which was a pioneering technique of medicine in Japan at the time when he started his academic career. He read many papers at the Congresses of the Japan Surgical Society and several other local medical meetings. He also published articles in various journals of surgery and medicine. He was particularly interested in the diagnosis and treatment of congenital dislocation of the hip and bones and joint tuberculosis. He was one of the pioneers of the Japanese orthopaedic community.